

機関番号：12501

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2009~2010

課題番号：21700601

研究課題名 (和文) 実践的力量を育成する教員養成カリキュラムの検討 -教育実習における連携指導を探る-

研究課題名 (英文) Study on teacher training curriculum for practical competence development

研究代表者

七澤 朱音 (NANASAWA AKANE)

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：10513004

研究成果の概要 (和文)：本研究は、教育実習前の大学における効果的なカリキュラムを検討・実践するとともに、一貫性のある大学と実習校との指導体制を検討することを目的とした。大学のマイクロティーチングでは、教師役学生の指導言が、複合状態から短文に整理される様子や相互作用行動の向上が見られ、説明における“質問機会の提供”と“明確な課題提供”が有意に向上した。教育実習簿と指導教官の指導内容の分析からは、実習生が「教材研究」「技能下位生徒への適切な相互作用」に課題を残すことが明らかになった。

研究成果の概要 (英文)：The purpose of this study was to practice teacher training curriculum for practical competence development, and to discuss a coherent system between university and teaching. The result of this study, pre-service teachers improved their basic explanation ability (giving chance for students to ask for clear explanation about tasks, giving precise learning tasks). But it is suggested that pre-service teachers experienced difficulty in “deficiency in knowledge of teaching materials” and “inability of giving feedback to students who don't have enough skills”.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学

キーワード：教育実習, 連携, 模擬授業

1. 研究開始当初の背景

全国で広く実施されている教育実習では、現場教師の指導の下教育実習生の教授技術の育成が図られている。また、そこで生起する出来事に対する研究はこの数年でかなりの広がりを見せている。これは、家庭環境や社会状況の変化により、教育現場における教師一人ひとりの責任がこれまで以上に重くなり、初任でも確実に一人前の教師として力量を発揮できる教師が求められる、という社

会のニーズが影響していると考えられる。

保健体育科の教師養成においては、教師としての有効な教授技術(高橋,1994)や、よい授業を可能にする授業評価方法などの研究(高橋ら,1996)が10年ほど前から行われるようになってきている。そして、着任当初から高い資質を発揮できる教師を育成するため、大学で模擬授業や教材研究など教員養成カリキュラムが実施されている。しかし、大学でのこれらの実践は、実際の生徒を交えて行う

ことができないため教育現場を忠実に再現することが難しい。そのため、大学で実施されているカリキュラムが、教育実習や教員に採用された後の実践に生かされにくい、という問題点があった。さらに、教育現場が、大学の教員養成課程に求める「教員志望の大学生が大学で身につけてきてほしい資質」が明らかになっておらず、大学における養成カリキュラムと教育現場のニーズにギャップがある、という問題もある。

2. 研究の目的

本研究では、将来体育・保健体育科の教職に就く大学生が、在学中に実践的な力量を身につけるための教員養成カリキュラム（模擬授業・教育実習）を再検討することを第一目的とし、教育現場が大学教育に求めるニーズを把握し連携し合い、より効果的なカリキュラムを再考することを第二目的とする。

3. 研究の方法

(1) 模擬授業の方法

①実施日

C 大学教育学部において、平成 21 年 6 月～7 月、平成 22 年 6 月～7 月にかけて行われた「ボール運動（木曜 1 限）」の模擬授業を分析対象とした。

②模擬授業の実施方法

模擬授業ではマイクロティーチングの手法を取り入れた（図 1）。

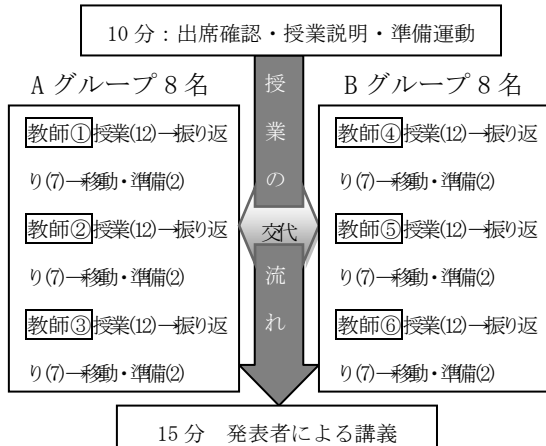


図 1. 模擬授業を行った 90 分の授業展開

グループを 8 名ずつの 2 グループにし、1 人の教師役が同教材を 1 週目は A グループに教え、2 週目はその教材に初めて接する B グループに教えるとした。これまでの研究で、2 年次では教材の知識が不足しており、教材を自ら用意することに困難を来したため、申請者が全員分の教材を用意し各自選択させる形を取った。振り返りの時間には、「振り返りカード」をもとに 8 名で授業を振り返った。振り返りの視点は、シーデントップ

(1988) をもとに設定し以下の通りとした。

a) 学習課題がわかりやすかった

- b) 何を達成すべきかよくわかった
- c) 指導者は与える情報を限定していた
- d) 指導者の課題提示の時間は丁度よかった
- e) 指導者の話すスピードは丁度よかった
- f) 児童が説明を求め課題を明確にする機会があった
- g) 評価基準が明確で具体化されていた
- h) 安全な学習環境がそろっていた
- i) 運動時間が十分確保されていた

③分析方法

1 回目と 2 回目の「振り返りカード」における評価点を、対応のない t 検定にて分析した。また、導入時における指導言語を意味のあるまとまりに分けて文章化し、大西の示す「発問・指示・説明」と「質問」に分類した。

表 1. 指導言の分類

	分類の具体
説明	思考にも行動にも働きかける指導言
指示	子どもの行動に働きかける指導言
発問	子どもの思考に働きかける指導言
質問	「はい」「いいえ」で答えられる問いかけ*

*に関しては、筆者が独自に設定した。

さらに授業時間の変容（直接的指導場面、マネジメント場面、運動学習場面、認知的学習場面）、相互作用行動の変容、受講生の課題レポートへの記述内容について分析した。

(2) 教育実習における研究

①調査日程と対象

C 大学教育学部において、平成 21 年 5 月～7 月、平成 22 年 5 月～7 月にかけて行われた教育実習を調査対象とし、「器械運動」と「陸上競技」を実施した教育実習生を研究対象とした。

②分析方法と内容

授業中の指導言語（相互作用行動）、授業後の振り返り内容（指導教官と行った振り返り内容）、実習簿への記録内容について分析を行った。

③インタビューとアンケート調査

指導教官へは、大学での授業に求める内容や実習生の抱える問題について、インタビューとアンケート調査を行った。

4. 研究の成果

(1) 模擬授業の分析結果

模擬授業における「振り返りカード」による評価点の分析では、“学習内容の明確さ”と“児童が質問をする機会の提供”に関して有意な結果が示された。また、“情報伝達における速さ”や“運動時間の確保”は 1 回目から高評価であり、事前に意識することにより実施可能であることが示唆された。しかし、“情報の限定”や“課題の評価基準の明

確さ”に関しては、1 回目より低い評価を示し、さらにその向上に有意な差が認められなかった。2 回の模擬授業のみでは、重要な情報を厳選し、その中から何ができれば良いのかについて判断を行い提供することが難しかったのではないかと示唆された。大学でのカリキュラムにおいて、これらを取り上げる必要性が示された。

表 2. 児童役学生における模擬授業の評価

	1回目(142)		2回目(144)	
	平均	SD	平均	SD
学習内容の明確さ	4.12	0.80	4.28 *	0.79
達成課題の明確さ	4.14	0.86	4.28	0.81
情報の限定	3.81	0.78	3.92	0.80
情報伝達にかかる時間	4.01	0.79	4.01	0.82
情報伝達における速さ	4.32	0.78	4.40	0.73
児童が質問する機会の提供	3.88	0.89	4.18 **	0.76
課題の評価基準の明確さ	3.83	0.88	3.90	0.86
安全な学習環境	3.96	0.89	4.01	0.83
運動時間の確保	4.37	0.82	4.28	0.84

(*p<0.1 **p<0.01)

次に、大西 (1991) が示す教師の指導言語「発問・指示・説明」と「質問」について、教師役学生の導入時における傾向について分析した。1 回目は教師役学生が「説明」と「指示」のみを行い「発問」をせず、さらに一文に多くの情報を複合して児童役学生に投げかけていた。しかし、反省会と 2 回目の模擬授業を通して、「発問」が増え、用いる文章が短文で端的になったことがわかった。反省会において児童役から“わかりやすく課題を提示してほしい”“長文ではなく整理して課題を提供してほしい”などといった内容が出されたことから、教師役の学生が改良を加えた結果と読み取れるだろう。

また、授業時間の配分においては、導入の説明に費やす時間が増加したこと、相互作用行動においては、具体的な肯定的フィードバックが増加したことが示された。本来は、導入にかかる時間は短くすることが授業評価を高めることにつながるとされている。よって、今後はより端的に導入を行うことを目標とさせ実施する必要がある。相互作用行動に関しては、望ましい結果が導き出され、模擬授業の 1 つの成果として捉えられるだろう。

最後に、学生によるレポートの分析では、彼らが困難だったとしたのが「図示を行う課題提示の仕方：82%」, 「言葉で情報を伝える課題提示の仕方：71%」, 「授業の展開の難しさ：59%」, 「運動学習中の言葉かけ：53%」

であった。カリキュラムの中で、説明能力を向上させる取り組みがさらに必要であるという課題が浮き彫りになった。

(2) 教育実習の分析結果

附属学校における教育実習では、対象学生の授業を全て録画し授業の実態を捉えた。その結果、授業では肯定的な相互作用行動が時間を追うごとに増えていったことがわかったが、費やした時間の分析からは、学習内容に直接関係のないマネジメント時間が減少せず、教育実習生が抱える課題が明らかになった。授業評価に、負の影響をもたらすマネジメント時間を減少させるための方法論を考えることが今後の課題となった。

次に、授業後に行われた反省会の内容を録音し、指導教官の指導内容と実習生の反省内容、計 7 時間 59 分の内容を全て文章化して分析した結果、実習生が授業全体をマネジメントしながら個々の生徒の指導を行うことや、運動のできていない生徒へ適切な言葉かけを行うことに難しさを感じるということがわかった。また、指導教官の指導内容としては、実習の開始直後は、授業のマネジメントについて (目標とする学習内容に時間以内に到達させる方法) の指導が多く行われていた。そして、中盤から、主体的な学習を誘う指導方法について (学習内容を均一に伝えるのではなく発問により生徒たち自らが課題を発見し考えるような授業展開を心がけるように)、指導内容が変容していった。運動学習場面に対する指導の在り方については、生徒に対する言葉かけの内容やタイミング、称賛や激励の言葉を多くかけるという指導が行われた。さらに、安全性への言及と生徒の自主性を高める授業のしくみについて指導を行っていることもわかった。

次に、教育実習生の実習簿のカテゴリー分析からは、「教材研究の不足」についての内容が最も多く、大学での実習前のカリキュラムで教材についての知識をより多く提供する必要性が示唆された。

最後に、指導教官へ行ったインタビューでは、教育実習生が授業を進めることに精一杯で、効果的な学習内容や教材内容は何かといった学習目標に関する部分までは踏み込めないこと、その運動はでき師範もできるのに運動ができない生徒への適切な声かけができないこと、つまり教材内容や運動学的な知識、運動を見とる力が低いという指摘を得られた。また、全 29 項目の「教員養成課程におけるカリキュラムに関するアンケート」の調査では、附属学校の教員が、「指導案の書き方」を身につけてきてほしいこと、「生徒指導の方法」と「保健についての理論」を学んできてほしいと考えている傾向が強いことがわかった。

二年間の研究を通して、模擬授業において

育成できる力量と困難な内容、また教育実習において身に付けた力量や指導教官の指導の実態が明らかになった。より良い教員養成カリキュラムの在り方を検討するために、今後も連携を主眼にして研究を継続していきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

① 七澤朱音, 教育実習生の実践, 教授技術の向上を目指す「授業評価」の手法と効果 (変わる力 探る 次代を育む-教師のためのスキルアップ支援) (体育授業研究), 女子体育, 査読無, 51(2)2009, pp.38-43

〔学会発表〕(計4件)

- ① Akane NANASAWA, Study on teacher training curriculum for practical competence development-Focusing on competence formation through microteaching lessons-, AIESEP 2010 World Congress in SPAIN, 2010. 10. 27, La Coruna (SPAIN)
- ② 七澤朱音, 実践的力量を育成する教員養成カリキュラムの検討 (3) -教育実習における連携指導を探る-, 日本体育学会第61回大会, 2010年9月8日, 中京大学
- ③ 七澤朱音, 実践的力量を育成する教員養成カリキュラムの検討 (2) -教育実習における連携指導を探る- 日本スポーツ教育学会, 2009年11月7日, 長崎大学
- ④ 七澤朱音, 実戦的力量を育成する教員養成カリキュラムの検討 (1) -教育実習における連携指導を探る- 日本体育学会第60回大会, 2009年8月28日, 広島大学

〔図書〕(計1件)

① 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖編著・七澤朱音, 大修館書店, 新刊体育科教育学入門, (2010) pp. 179-186

6. 研究組織

(1) 研究代表者

七澤 朱音 (NANASAWA AKANE)
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号: 10513004